



# 地域の文化財を地域で維持・管理する仕組みの構築 と行政の役割(第2部コメント)

渡辺, 伸行

---

**(Citation)**

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 9:15-16

**(Issue Date)**

2011-01-30

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002696>



## はじめに

遺跡を保存する方法で最も確実な方法は、法律、条例にもとづく史跡として指定することである。しかし、行政側は指定までの実務は担当するが、その後の維持・管理は所有者の責任となり、所有者の事情によっては、十分な管理が行き届かない例や活用が疎かになっている史跡もないとはいえない。そこで、地域の文化財を地域で維持・管理している具体例を紹介し、歴史文化遺産を維持・管理していく方法として、地域と行政の望ましいあり方を考えてみたい。

### 1 端谷城の事例～その後～

端谷城は、2003年の第1回「歴史文化をめぐる地域連携協議会」でも報告したが、所有者の熱意でこれまで保存されてきた城跡を、里作り協議会が主体となり、地域のシンボル、住民の憩いの場、交流の場として、環境整備した地域の文化財である。その後、2001～2005年度に神戸市教育委員会が発掘調査を行い、その成果を踏まえ、2008年度に神戸市史跡に指定された。

端谷城は長年、所有者の努力で維持管理されてきたが、所有者の高齢化に伴い、独力で管理することが困難となり、神戸市に土地の買い上げを要望された。それを受け所有者と自治会と行政の三者で協議し、土地は現所有者のままとし、その代わり所有者の管理活動を地域の自治会が主体となって行うことで所有者の納得を得た。所有者の意向を汲んで、自治会が中心となって、端谷城跡管理会を結成し、端谷城を不特定多数の人が利用できる市民公園(神戸市市民公園条例 昭和51年4月1日 条例第16号)として位置づけ、2007年に神戸市に申請し、認定を受けた。認定後、管理会は市民公園の維持管理に若干神戸市の助成を受け、端谷城の定期的な清掃や管理を行いつつ、現在に至っている。

### 2 端谷城の維持管理活動と活用

端谷城跡管理会は、年2回の清掃や樹木伐採、散策路の柵の補修などの活動をされている。城跡管理会が自治会の内部にあり、自治会の役員が交代しても、その活動は引き継がれるという確実性がある。教育委員会は、地元の維持管理活動に対し、資材の斡旋の協力や相談窓口となっている。

現在は地域が史跡を維持管理し、周知と活用を行政が行うという分担がされている。西区役所、連絡所主催の史跡・文化財を訪ねる市民ウォークやバスツアー、中・高生の歴史現地授業等で端谷城は活用されている。

### 3 端谷城の活用例～都市住民との交流～

2006年度から西区役所と教育委員会が共催する形で、「西区地域学」を開催し、地域の史跡や文化財に触れる催しを行ってきたが、2010年は12月に「中世の山城を巡ろう」というテーマで城跡巡りウォークとバス見学を行った。参加者の殆どは都市住民である。地元の協力で公会堂の提供を受け、地元住民と都市住民と一緒に聴講することで、端谷城の調査成果報告会を開催した。その後城跡を見学し、発掘調査担当者から説明を聞いた。端

谷城の見学後、地域の手作り醤油会社で醤油にまつわる話を聞き、蔵内部を見学して地域の行事を終えた。参加者の醤油購入で、地域経済に多少なりとも資することができた。

参加者のアンケート結果では、都市住民は自分が住む地域についての知識を求めており、特に歴史は中高年の都市住民層に根強い人気がある。健康ブームにのるウォーキングを取り入れた史跡や文化財めぐりのイベントは人気が高い。こうした潜在的な文化財支持者を、一歩踏み込んだ史跡の管理と活用はどう巻き込むかが今後の課題である。

#### 4 行政の役割と地域との関係

史跡を将来に向け、保存していくためには、地域の協力を取り付けることが大切である。そのためには地域の史跡の維持管理を支える活動に、都市住民の参加を募ることも一案である。その仕掛け作りは、行政関係者が中心となっていく必要がある。イベント参加者のアンケートによれば、都市住民の意識は高い。行政が事前に地域に入り、その意義を説き、地域の理解を得て、広報等で趣旨説明をして募集すれば、協同作業は可能と考える。手始めに教育委員会では埋蔵文化財センターボランティア有志で、地域住民と共に端谷城の伐採や清掃を行うことを計画している。

飛鳥・平城宮跡や吉野ヶ里などの大規模な国営歴史公園と比較した場合、地域の人々の目が行き届いているような史跡が、訪れる人に、人の息遣いのする場所、よく手入れの行き届いた場所という感想を抱かすのではないだろうか。端谷城はそれを目指している。

指定はされたものの活用されていない史跡もある中で、端谷城も新たな活用法を模索している。その仕掛け作りはもちろん行政が行い、行政の様々な地域助成メニューから適したメニューを選び、地域に情報提供し、働きかけることで新たな活用法が生まれるものと期待される。一例として、地域活性化に繋がる地域と都市住民が交流する城跡まつりの開催を提案したいと考えている。

地域に住み続ける人々にとって、史跡が地域の誇りや地域のアイデンティティとなるには、その地域が一度は訪れてみたくなる場所、魅力を持った場所になる必要がある。他所から人が大勢訪れて、地域の人々の意識も変わり、そこに住むことに自信と誇りが生まれるのではないだろうか。地域と行政がタイアップして、地域の魅力作りとその発信に、地道に取り組んでいくことが求められているのである。



端谷城を目指す城跡巡りウォーク



地域と共同で行った寺谷公会堂での報告会